



マイ スコープ

ビギナーのひとりごと

柏崎市 阿部松夫

私はバードウォッチャーとしては、全くビギナーである。時折野鳥の会の会報を頼りに夏の里山、冬の湖沼に足を運んでいる。

探鳥会では何よりも野鳥の姿形と名を一致させ、“知っている鳥の数”を増やしたのだが、これが容易ではない。第一鳥は種類が多い。そのうえ、雌雄で色や大きさを異にし草木の茂みに潜んで瞬時も動きを止めない鳥を視界に留めるだけでも大変である。

ところが、野鳥の会の皆さんと一緒に歩くと、さすがに専門家の眼力・聴力には敬服せざるを得ない。さえずりの種類と方向を素早く聞き取り「あの辺りに〇〇が…」と教えてくださる。急いで望遠鏡を向けるが、たいていは野鳥の会の方々にご細かく指示されてようやくキャッチできるのである。それでも、丸いレンズの中の鳥の影を捕えるまでの、子供のようにやり立つ気持ちは、バードウォッチングの大いなる楽しみの一つであろう。

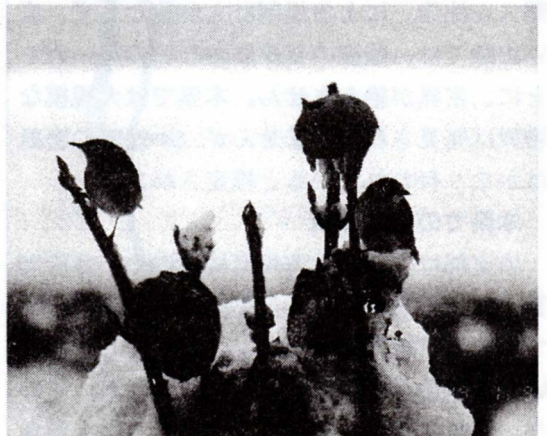
そのレンズだが、私のものはニコンフィールドスコープ、倍率20倍というやつで、画像も鮮明に結ぶ、これに頑丈な三脚がついていて、自分で言うのもおかしいが、私には過ぎた代物かもしれない。どの探鳥会にも私同様のビギナーが何人かおられる。一人で見ているのももったいないので、望遠鏡を持たない方から見てもらうようにしている。使う頻度も低く、また、十分に使い切っていない持ち主の、これがせめてもの望遠鏡への罪滅ぼし？

であろう。

冬、餌を求めて人家の近くに小鳥がやってくるので、庭木の枝の上に熟柿を置いてやった。ガラス越しに見ていると、早速メジロがやって来て首をかしげてついばみ始めた。

暮れから滞在していた一歳の孫を抱き上げて「ななちゃん、ほら、ピッピ ピッピ、かわいいね」と見せてやる。「ピッピ ピッピ」孫も眼を輝かせて、おうむ返しに繰り返す。

窓の外の小鳥を指さし、喜びを全身で表わそうとする孫を抱きながら、私の胸には幼い命への限りないとおしさが湧いてくる。誠に小鳥たちは、人の心の無垢の美しさや優しさを引き出す天の賜物ではないか。“もしも小鳥がいなくなったら、この世界の美しさは半減するだろう”とは、真実を語って偽りない言葉なのである。



県内の野鳥密猟事例と 密猟現場での対応について

保 護 部

古来より野鳥を捕獲して食肉用に、また羽毛を保温・装飾用に、さらには剥製用に供したり、愛玩用に飼養したりする習慣は、国内外を問わず行き渡っています。こうした人間の所業によって、多くの鳥の種が絶滅や激減に追いやられました。

わが国では食肉用の狩猟鳥としては、狩猟免許所有者に数を制限して29種の捕獲が認められています。この狩猟鳥を含め、学術研究や有害鳥獣駆除などで、環境庁長官や県知事の許可がある他は捕獲できないことになっています。また県知事の許可を得て、愛玩用に飼養できる鳥は、従来の4種類が今年度からメジロとホオジロの2種類だけとなりました。しかしメジロやホオジロも含め輸入した鳥は、業者が発行する輸入証明書があれば飼養できることになっています。(この辺が問題です)こうしたまゆつばものの輸入証明書によって、日本にもいる鳥がいくらかでも飼養できると共に、鳥の飼養を好む人がいるところに、密猟がなくならない原因があります。

一方、猟具についても一時に大量の鳥を捕獲できるカスミ網は、1947年に一般の使用は禁止されていましたが、販売・所持・譲渡など自由でした。1991年にはそれらも原則禁止されて厳しくなりました。「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」による規制にもかかわらず、広い山野では、監視の目が届かないのをいいことに、密猟が絶えません。本県では大規模な密猟は発見されていませんが、小規模の密猟はかなり行われていると推定されます。

本県での目撃事例

当支部は、1995・96年度に県内の小鳥店調査(会員の任意参加)と平行し、密猟についても現場目撃や情報などあれば報告して欲しい旨、全会員に調査をお願いしました。その後、支部報No.48(1999.10月発行)にも密猟

に関する情報提供のお願いを掲載しました。これらにより、2名の会員から4件の目撃事例が寄せられましたので、ここに報告いたします。

以下①年月日②密猟現場③密猟者数④密猟道具⑤捕獲鳥の種類と羽数⑥状況その他

【事例1】 報告者:山賀哲夫

①'94,8/14 ②東蒲原郡津川町キリン山

③1人 ④カスミ網1張・テープレコーダ・おとり ⑤まだ捕獲前
⑥8月半ばというのに、コガラ・ヤマガラ・

マミジロ・メボソムシクイ・クロジなどの囀りが聞こえてきたので、テープの録音とわかり、最初は遠くから双眼鏡でのぞいていたが、人の気配がないので現場に近づいた。密猟の位置や状況を記録していると、そのうち密猟者が現れて「何してるんだ!」という。色黒く一見こわそうな顔だったが、ひるまずに「お前こそ何だ!カスミ網の使用許可免許証を見せろ!私はこの町の鳥獣監視員だ!」と言って、すぐ止めるように言い、止めなければ警察に通報するぞとおどかしたら、「悪かった」と言って「大目に見てくれよ」と懇願してきた。(「鳥獣監視員」はとっさに出た嘘で、後で深く反省した)いろいろ聞いてみると、昔この山で網を張って小鳥を捕まえたのがなつかしく、お盆に帰ったらやろうと思って実行したと言う。(この時の様子は「野鳥新潟」第91号に掲載)

なお、この後所管の警察署にカスミ網の密猟者がいること、町には野鳥を飼養している人が多くいることなどを報告して、然るべき対処をお願いしたが、ナシのつぶてであった。

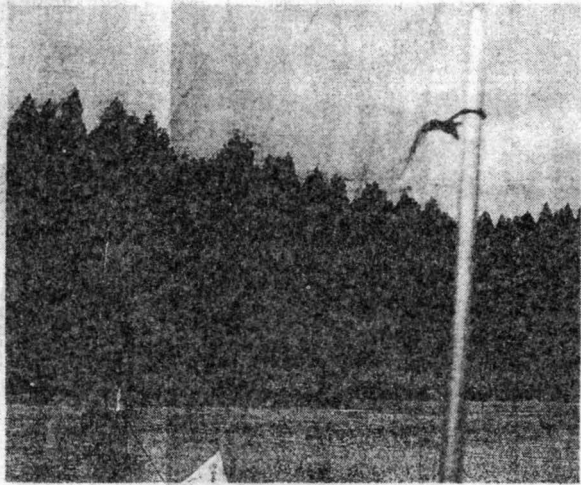
【事例2】 報告者:山賀哲夫

①'95,9月上旬 ②東蒲原郡津川町角島(阿賀野川右岸)の農道 ③1人 ④カスミ網1張(おとり) ⑤カワセミ(幼鳥)1羽

カワセミかわいそう

津川の農道に違法かすみ網

東蒲津川町の阿賀野川右岸で、狩猟・販売が禁止されているかすみ網が仕掛けられ、狩猟禁止の野鳥・カワセミが、かかっているのが見つかった。カワセミは町内の野鳥愛好家に保護されたが、弱っている朝、死んでしまった。関係者はかすみ網が禁止されていることを訴えるため、このカワセミを保護して、町内の小学校に置く準備をしている。



農道に仕掛けられたかすみ網。津川町東区、山賀丈夫さん農園

山賀さん はく製にし保護訴え

いたのは今月上旬。同町角島の農道に高さ約1メートルの金属製のおさねを立て、仕掛けられてカワセミがかかっていた。近所の人が見つければ、野鳥の会会員の津川町五区、山賀丈夫さん農園に連絡してきた。山賀さんが確認したところ、かかっていたのは生後約一年のカワセミの幼鳥。保護したとき、飛べそうだったので現場で離しみたが水中に落ちたため、持

新潟日報

1995.9.12(27)

ち捕って保健所や野鳥愛護センターなど連絡を取り、手当てしたものの翌朝には動かなくなった。カワセミは清流に住み、小魚を捕食とする狩猟禁止の野鳥。コンクリート護岸では営巣できないことが添えて、置いてもう予定ら、自然のパロメーターと



かすみ網にかかったカワセミ。翌朝死んだ

⑥近所の人が見つめて連絡してくれたので、行ってみたらカワセミの幼鳥がかかっていた。後で密猟者が来たので、この違法な行為とカワセミは保護を要する野鳥であることを話し、カワセミはその場で放した。まだよく飛べず、水中に落ちてしまったので、持ち帰って保護した。地元保健所や県の愛鳥センターにも連絡をとって手当をしたが翌日落鳥してしまっ

た。前回の密猟発見の時に、警察に密猟や野鳥飼養についての対処を要望したが、何もしてくれなかったの、この時は新潟日報の地元支局長と相談して記事にして出してもらった。ところが日報に出たら地元の警察署と保健所は、所管機関より先に事が知れわたったために、メンツがつぶされた格好となり、違法のカスミ網の事はそっちのけで、連絡義務違反

だの貴方も同罪だのと強圧的に問い詰められた。今では警察や保健所に連絡しなかったことを反省しているが、当時は何もしない怠慢な体質に憤りを感じていた。

【事例3】 報告者:本間隆平

①'94,4/17 10:30頃 ②岩船郡神林村塩谷海岸 ③2人 ④テープレコーダ1台・トリモチ各人1本計2本・^{おとり}罠のヒガラ各人1羽計2羽 ⑤ヒガラ各人4~5羽計10羽前後

⑥道路直ぐ脇のアカマツ林内に軽自動車2台が止めてあり、ヒガラのテープを流していた。70才過ぎの男性2名がいて、^{おとり}罠のヒガラの籠にトリモチの棒を差してヒガラを捕っていた。悪びれた様子もないので、捕獲許可証を持っているかと聞くと、「家に置いて来た」と平然として止める様子もないので、強い態度で「ヒガラの捕獲許可は環境庁長官の権限で、簡単

には許可はしないはずだ。すぐにやめないと警察に連絡する、警察に掴まればただでは済まないぞ！」という、急に「悪かったね」とおとなしくなり、片づけて掴まえたヒガラを持って帰ろうとしたので、それを全部放鳥させた。2人は大変残念そうに渋々放したが、幸いトリモチによる羽毛の損傷もなく、全部飛び立っていった。密猟者の2人は常習犯と思われた。(密猟者の車番号も記録)

これがもう1人いたり、携帯電話を持っていれば、警察にも通報できたが、それらもなく、相手が2人でもよぼよぼに近い老人という状況だったので、現場で1人で対処した。

[事例4] 報告者:本間隆平

①00,6/29 AM7:30頃 ②北蒲原郡紫雲寺町紫雲寺ゴルフ場脇のアカマツ林内 ③1人
④テープレコーダ・トリモチ1本・罠のメジロ1羽 ⑤まだ捕獲せず

⑥オオタカの観察をしていると、林の中に60歳前後の男が立っており、テープから流れるメジロとヒガラの声が聞こえた。近づくとトリモチをつけた籠に罠のメジロを入れていた。まだ捕獲していなかったが、「聖籠町から来て取れるかどうかちょっと楽しんでいる」と照れくさそうに言っていた。飼養許可証は家に置いてあるという。直ぐに止めるように言ったところ、鳥籠とトリモチ棒を片づけたが、トリモチ棒は数本まとめて竹筒にしまい込むなど、誠に手慣れた様子から、これも常習犯と思われた。この時期にこの辺にヒガラはいないから、おそらく巣立ったメジロをねらって来たものと思われる。密猟者はいち早く私のいることに気づいていたので、警察に通報してもこれ以上の進展はなかったものと思われる。(密猟者の車番号記録)

密猟現場を見つけたら

以上の4例は密猟の現場を見ついたり遭遇した場合の対応について、よい教訓を示しています。これも参考に密猟現場での対応の仕方を述べてみます。

1) まず密猟現場の位置を詳しく知り記録すると共に、遠くからでも(双眼鏡を使って)

現場の様子をできるだけよく見て記録する。密猟道具としてカスミ網・トリモチ・罠の種類と羽数など。

ただしカスミ網は標識調査にも使われるので、その場合は環境庁の赤い小旗をつけてあるので、よく見ること。

2) 近くに密猟者の車があったら(何らかの方法で確認) そのナンバーを記録する。

3) 知らないふりして更に近づくことができたら、密猟者の人数、捕獲した鳥の種類と数など記憶して引き返す(後で記録)。

以上1), 2) の段階でもよいですが、終えたら早急に110番で警察に連絡します。携帯電話があつてその場からだとなお早いでしょ。

密猟者がどんな人物かわからないし、山中でのこと反抗でもされてどんな事態になるか予想されないので、1人や2人で現場で対処するのは避けた方がよいでしょう。ここに掲げた事例では、いずれも発見者1人で勇気をもって対処していますが、幸い密猟者の方で敵わないと思つてか(?) 直ぐにやめて帰っています。もし屈強な男だったらどう出たか分かりません。密猟者は発見された時、たとえその場で止めたとしても、またどこかで必ず密猟しますので、やはり警察の手にかけるのが一番です。もし警察の対応が悪かったときは、全国野鳥密猟対策連絡会(略称:密対連)まで連絡して下さい。同会ではこれまでの実績で、密猟問題で警察に対しては相当の発言力や影響力を持っております。

全国野鳥密猟対策連絡会(事務局:京都)

TEL・FAX 075-864-0777 中村桂子 方

Home page Address <http://www.tatsutomi.co.jp/mittairen/index.html>

(本稿をまとめるに当たり、本間隆平氏および全国野鳥密猟対策連絡会より、種々ご指導いただきました)

[担当:山本 明]

紀行：カムチャツカ鳥類標識調査行（その2）

新潟市 千葉 晃

*ピストラヤ湖畔でのキャンプ生活

ほこりを立てながら走り続けてきた3台の車は急にスローダウンし、左折して悪路をさらに川岸へと向かった。広い草原のあちこちに小さなカバノキが見え、やがて丈の高い木立のそばで車は止まった。ここがキャンプ地である（後でわかったが、木々は水分の多い川岸などでしか充分成長できない様子だった）。時計は午後6時を指していた。しかし、実感として午後1時か2時位にしか感じない。木立に囲まれた芝生のような草地に野営の跡があった。昂ぶる気持ちをおさえながら荷物を下ろしているとニックさん（N.ゲラシフモ博士）がいたずらっぽく眼をして僕に「来るように」合図する。言われるままに川岸に近づくと、幅10mもあろうか、浅瀬がみえてきた。せせらぎの向こうには倒木の混じる河畔林とスゲ類の草地があり、水は冷たくよく澄んでいた。「すばらしいところですね」と思わず日本語でニックさんに言ってしまった。足元のよどみには泥がたまり、小魚が驚いて霧散する。泥の一部を指すニックさんの指先にはくっきりとヒグマの足跡がみえた。よく見るとそこにもあそこにも。両腕を上げてクマを真似するニックさん。我々は間違いなくヒグマの住処に分け入り、かすみ網を張ろうとしているのだ。

サポートの人々のお陰で手際よくテントを3張り設営し、食卓を兼ねた作業台に雨よけの屋根をしつらえた。といってもただ厚手の透明ビニールシートを板と釘で留めただけである。作業の合間にコーヒーをすすり、野営準備が着々と進んだ。焚き木や飲み水の準備、食事の仕度などキャンプ生活の重要部分はみな地元ロシアの人達がやってくれるので、5人のヤボンスキーはユーラさん（Y.ゲラシモフ博士）とニックさんに言われるまま、2人



図1. 川岸の泥につけられたヒグマの足跡

を手伝うようなかたちで調査用のかすみ網をセットした。網を張り終えて一休みすると辺りに夕闇がせまってきた。地元サポートの面々はゲラ博士父子一家とその友人達なので、皆とても仲良く家族的で、親戚一同野外生活を楽しみにきているような印象を受けた。また、半分はそのとおりだった。日中、アラさん（ゲラ博士夫人）は嫁さんといっしょに草原に出かけ、食後のデザートにとブルーベリーをバケツに半分ほど摘んできてくれた。彼等の楽しい話らいと食事風景に誘われながら我々も地元の野営料理をいただき、ロシアビール、ワイン（様々な果実酒）、そしてもっと強いヤツ「ウォッカ」も試してみた。日が傾くと急に寒くなる。熱い紅茶、焚き火、そしてアルコールが恋しくなるのは自然の成り行きというものだろう。夕食には予期せぬご飯（炒めご飯）も出た。主食ではなく、おかずとしてである。魚のフライ、パン、チーズ、イクラ、サケの薫製などが振舞われ、豪華なディナーとなった。夜9時頃夕食を終え、かすみ網の見まわりを終えた頃にはとつぷりと暮れ、深々と冷え込んできた。キャンプ初日は見るもの聞くものすべてが新鮮で、おっちょこちよいで興奮し易い自分には一寸刺激が強すぎた。澄み切った夜空に満月が煌々と冴え渡り、遠方にガナルスキーの山並みが青黒いシルエット

トとなって横たわっている。このような澄んだ夜空はこれまで経験したことがなかった。あまりにも神々しい光景なので、しばらくはテントにもぐり込まず、この景色を脳裏に焼き付けておこうと1人カバノキのそばにたたずんだ。

翌朝はテントの天井につるした鳥袋の中で動く小鳥の羽音と鳴き声で目を覚ました。昨夜最後の見まわりで網から外した小鳥たちである。テントから顔を出すと一面ガスが漂い、これまた初めて経験する光景であった。気温はセ氏1度。地面は白く霜がおりていた。遠く、カバノキの頂部から「チューイー・チューイー」と小鳥の鳴き声がしてくる。声の主は後でアカマシコであることがわかった。7時半頃、ユーラさんが起きてきて、焚き火をはじめた。薪のはじける音、焚き火のにおいの中でコーヒーをすすりながら、標識調査の2日目が始まった。この日から11日間、ユーラさん（統率）、リーダさん姉妹（食事準備）、そしてヤポンスキー5人（バンダー）の共同生活が始まった。以後、7時半起床、調査。9時半朝食、調査。14時昼食、調査。21時夕食、23時最後の見まわり・就寝といった調査漬けの日々が続いた。風呂にも入らず、髭を剃る間もなく過ごしたため、調査終了時の私の顔は玉手箱を開けてしまった浦島太郎にも似た容顔になっていたものと思われる。

* 標識調査の様子と捕獲・放鳥した野鳥

かすみ網は網目の異なる3種類（30、36および64メッシュ）を用意し、キャンプ地を境



図2. 作業テーブル

にして北と南に分けて最大32枚をセットした。網場はいずれも川岸に沿っているが、周囲にはブッシュあり、疎林あり、草原ありで、様々な環境に棲む小鳥たちをもれなく、たくさん捕獲・放鳥しようとするユーラさんたちの意



図3. レンジャーのセルゲイさん(中央)と調査員

気込みが伝わってきた。藪を払い、草を倒しながら網場をつくったが、網を張るポールは金属製のパイプではなく、現地で調達した手頃なカバノキの幹である。金属パイプに慣れ親しんだ我々にとって、これは実に使い難い代物で、一本一本に細紐を縛り付け木製のペグで引っ張り地面に固定するというものであった。このため、雨が降っても網をたたむことは出来ず、網が緩むと張りなおすのに一苦労する大変に使い勝手の悪い道具ではあった。しかし、これでやるしかない。雨がふったら、見まわり回数を増やす方法で対応することにした。これが、ここでのやり方である。すでに渡りが始まっているらしく、網にはいろいろな小鳥がかかった。オオジュリン、カシラダカ、メボソムシクイ、コガラ、ノゴマ、シマセンニュー、ビンズイなど新潟で標識される見覚えのある鳥たちに混じって初めて見る北国の小鳥たちが次々に記録された。コアカゲラ、シマゴマ、オガワコマドリ、マキノセンニュー、ムジセッカ、オジロビタキ、アカマシコ、シマアオジなどである。また、ツメナガセキレイやホシガラスのおまけまでついた。ユーラさんのはからいで、標識リングの装置と記録法方は日本式で良いことになった。網からはずした鳥は種類ごとにわけ、皆学名で呼び、記入する。そんなわけで、作業場で



図4. ユーラ博士（左端）、
リーダさん姉妹および調査員

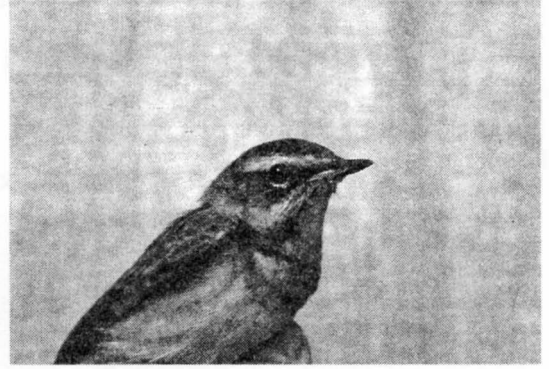


図5. 放鳥を待つオガワコマドリ

は日本語、ロシア語、英語、ラテン語（学名）などが入り乱れ、最初の2・3日は皆大変だった。この間、私はもっぱらメボソムシクイの計測と採血に追われ、頼まれていた寄生蝇の飼育と記録、終了後のノート記帳・整理など結構忙しかった。このため、網場へヒグマが出たと聞いてもあまり恐怖感はなかった。しかし、その直後網場に鳥をはずしに向い、網2枚が何物かにごっそり引っ張られ、辺りにブルドーザーが通ったような形跡を見た時には思わず立ちすくみ、背筋がぞーっとするのを感じ、以後そこへは1人で行けなくなってしまった。ヒグマが網にかかったら何番リングをつけようかななんて冗談も出ない有様だった。この日以来、作業場にはライフルが常備され、見まわりにはいつもやさしくて力持ちのレンジャー、セルゲイさんがエスコートしてくれることになった。我々は腰にクマよけのカウベルをぶらさげ、ユーラさんに進められたクマよけの唐辛子スプレーを持ちながら網場見まわりをすることになった。過ぎてしまえば笑い話のようなことがいくつも経験できた。

この15日間は、カムチャツカのやさしい人々とすばらしい自然に

浸った忘れがたい日々となった。そして、毎年独力でカムチャツカと日本を往復する渡り鳥の強靱さにあらためて驚嘆した日々でもあった（完）。

表1 1999年カムチャツカ鳥類標識調査結果

種名	1999 8/26-9/4		1998 9/5-17(9/6-16)		1999年の傾向
	新放鳥	再放鳥	新放鳥	再放鳥	
カッコウ(new)	2				
コアカゲラ	22	3	6	3	増加
ツメナガセキレイ(new)	3				
ハクセキレイ	2		20		減少
キセキレイ	4	1	6		
ピンズイ	131	8	172	11	減少
タヒバリ	1		55	3	減少
セジロタヒバリ	2		7	2	減少
シマゴマ(new)	16	3			増加
ノゴマ	41	9	50	12	微減少?
オガワコマドリ	4	2	1		増加
ルリビタキ	9		19		減少
マミチャジナイ	18		56	1	減少
シマセンニュウ	49	26	11	1	増加
マキノセンニュウ	6		2		増加
ムジセッカ	14	1	3	1	増加
メボソムシクイ	185	11	101	9	増加
オジロビタキ	107	7	8		増加
エソビタキ	22		4		増加
コガラ	345	9	66	5	増加
ゴジュウカラ(new)	7				増加
カシラダカ	490	23	810	33	減少
シマアオジ	33	5	2		増加
クロジ	21		15		微増加?
オオジュリン	153	33	125	36	微増加?
シメ(new)	1				
アトリ	6		44		減少
カワラヒワ	2		2		
ベニヒワ	1	1	2		
アカマシコ	47	4	5		増加
ホシガラス(new)	3				
計 31種	1,747	146	1,592	117	
使用網数(最大)	32枚		42枚		

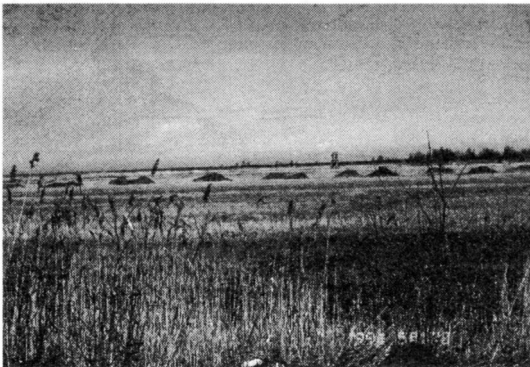
フィンランドのエリマキシギたち

新潟市 瀬尾 澄子

カーテンから差し込む光に目覚めるとまだ2時だが外は図鑑が読めるほど明るい。北欧の「白夜」の初体験だった。5時にはもう起き出した。窓からみえる駐車場の隅には雪があり、道路側の白樺はまだ冬木だが何か動いている。おなかの黄色いシジュウカラ、真っ赤なウソ、ワキアカツグミや少し大きいノハラツグミも飛んできた。たまらずホテルの裏へ出てみると湿地に続いて草地、海が広がり、カワアイサにホオジロガモ、マガモなど6種が望遠鏡で何とか識別できる。海へ注ぐ小さな川はまだ凍っているが、川岸の柳の黄色とまぎらわしいキアオジが春の歌を歌っている。空ではダイシャクシギが独自の声をあげながら、ディスプレイ・フライト、ヨーロッパチュウヒは目の前で高度を下げた。枯れた草地と草地の切れ目をエリマキシギの行列がゆく。飾り羽は茶色や藍色、真っ白などの夏羽の雄たち。

NHKの「生き物地球紀行・北欧フィンランド・村がささえる野鳥の楽園」('97.12.1)の鳥と人が信頼しあい共存しているリミンカ村に惹かれて、近くへの鳥見のツアーに参加した。

昨年5月16日、成田からヘルシンキ(9時間半)、すぐ国内線1時間で文字通り「森と湖」の上をオウルへ飛ぶ。オウルはバルト海の奥、



5/17 アカアジシギ・エリマキシギのいたところ



5/19 広く見渡せたボスニア湾ハイルオト島の観察台 抱卵中のカンムリカイツブリやハイロガン・シマアジなどのガンカモが多数観察出来た

ボスニア湾に面するフィンランド中部地方の州都で、今はやりの携帯電話に世界一の占拠率を持つ「ノキア」の研究のあるところだそう。現地ガイドの出迎えを受け夕方6時過ぎに郊外のホテルに着く。時差はサマertimeで6時間遅れ。駐車場では車の国籍もいろいろだ。梢のさえずりはズアオアトリと教えてくれたのはオーストラリアからのバードウォッチャーだった。

17日、この日午前はリミンカ湾の奥の耕地へ向かう。まだ一面の枯れ草が海まで続く最初のポイントでは黒いツルシギの群れに黒っぽいのがいたけれど、何しろあの襟巻きだからすぐに分かった。近くに一羽クロヅルもいた。空にも地にも福島潟でおなじみのタゲリがいる、ここではみんな夏羽だ。次のポイントまで農道を歩き出すと畑の盛り土の小山にときおり、アカアシシギがそれぞれ1羽立っていて足が遅くなる。急いで皆に追つくとまもなくエリマキシギが30羽ほど飛来、アカアシシギのまわりに降りた。頭上・後頭と胸から襟の色は共に同じく真っ白なのを1羽見ただけで他はみな違っていた。それぞれ黄みを帯びた茶色に黒と白が混ざり、赤茶に金属光沢のある紫、黒に赤茶、その他とても複雑な色合いで表現が出来ない。見とれてメモをす



5/20 クーサモへの道 ロシア国境ミコアイサ
キョクアジサシのいた殆ど凍結していた湖

る暇もない。飾り羽だけでなく体色もいろいろなのが2羽、3羽、5・6羽と向き合い競い合い個性をアピールしている。群には雌がいたとみえ、1羽がしっかりと交尾行動を始めたころ、けたたましい声に見上げるとオグロシギが2羽追いかけてあっている。ケアシノスリも飛んでいった。天気さえずるオオジュリンの黒い頭も見つかった。

別の日、森に囲まれた小さな湖で国鳥のオオハクチョウのそばで金色の耳飾りがり光輝いていたミミカイツブリ、北の湖で静かに威厳を持って浮かんでいたオオハム、もっと北のロシア国境に近い大きな凍結した湖でやっと融けだした湖岸でディスプレイしていたミコアイサにホオジロガモ、その上をたくさんのキョクアジサシが舞っていた。

雪の山道をすすみ、谷をはさんで向かいの岩山に岩と見分けのつき難い抱卵中のワシミズクを教えて貰った。よくも見つけたものと感心する。小さなズメフクロウは巣箱の上蓋を開けてそっとのぞかせて貰ったし、キンメフクロウ、ミユビゲラなど見聞き出来た130種は日本の図鑑で親しんでいた鳥が多くて楽しめた。

この時期天候の変動が大きく、ぬかるみもあって「防寒具・長靴」持参との案内、実際朝0℃から22日の帰国のころには昼26℃にもなって蚊も出てきたし、風の強い海岸でふるえたこともあったけれど、鳥にもガイドにもツアー仲間にも恵まれて思い出すたび心躍る野鳥の楽園だった。

忘れられない鳥

西蒲原郡味方村 木下 徹

野鳥を見始めて30年近く経過し、新潟県初記録となる珍鳥を観察した時の心躍る感動は何度か味わえることが出来たが、心の奥底に与えてくれた鳥がいる。その鳥こそが今の野鳥観察と命の大切さを心に刻ませてくれているような気がしてならない。

野鳥に関心を持つ前、近所では伝書鳩を飼うことが流行っており、私も20羽程度の鳩を飼っていた。初列風切りが白い俗に言う「サシ」の鳩が好きだったが、なかなか手に入らず、何度かの交配の後ようやく希望のヒナが生まれた。雨覆いに2本の線の入ったきれいな「ニビキのサシ」であった。レースには参加しなかったが、ヒナの頃から3km程離れたところから放鳥しており、帰ってこないときは夢にまで見て心配していた。すべての鳩の識別と健康状態を把握していたが、一番気に掛け、友のように接していたのがこの鳩で、唯一名前を付けてかわいがっていた。

しかし5～6年が経過し、飼うことに飽きてきた頃、次第に餌を与えることも少なくなり、給水だけの日々が続いたある日、これでは全部の鳩を殺してしまうと思い、窓を開けっ放しにして外に自由に出入りさせることにした。数日後すべての鳩が鳩舎に戻らなくなり、ある意味ほっとしていた頃、あの「ニビキのサシ」が1羽鳩舎内で死んでいた。他の鳥はみんな逃げていったのに、この鳥だけはまたここに戻り餌を求めていたのだらうと胸の内からこみ上げるものがあつた。あまりにも大事にしすぎたのか、触れ合いが有りすぎたのか、涙せずにはいられなかった。その後生き物を飼う気にもなれず。命の大切さを思い、鳥の姿を求め自然に生きる鳥を外から眺めている。

わが家は野鳥観察舎

北魚沼郡小出町 柳瀬昭彦

朝日の下に雪白く、越後と会津の国境に連なる山々、あの上を久しぶりの晴れ間ゆえ今日はイヌワシが舞うだろう。行きたいなあ、見たいなあ、でも今日は家人の解放日、老母介護のわが家では外出も交代で、とはいつてもどうしてもわたしの出る日の方が多いからたまの外出、なるべく家人優先となる。

いらつく気持ちにふっきれたのはある雪の日、家の前を流れる魚野川の川面からカモが一斉に飛び立ち上空を小群となつてばらばらに右往左往、間もなく下流からゆっくりはばたきながらオジロワシの成鳥がやってきた時だ。ああ、家の中にいながらにして天然記念物の生きものを見られるとは、恵まれた環境に生活しているんだなあ実感した。

トビには平気なカモたちがスクランブル？発進するのは猛禽来襲のしるしで、ミサゴが帆翔した時、ハヤブサが急降下した時、一見静かに見える「平和」な川面に結構「事件」が発生しているのである。わたしの家は、その「野鳥観察舎」である。

わが町を流れる魚野川は右岸がコンクリートでかためられてはいるが、左岸は昔のままに岸边に柳の大木が並び葦原が細長く続く。先年「町の鳥」に選ばれたカワセミがその美しい翡翠の色を岸边のネコヤナギに見せ小魚を狙っている。右岸にはとまり木がないから左岸に姿を見せるのだ。わたしの家はその左岸が目の前だからツイーッという声が家の中まで聞こえる。双眼鏡で家事の手を休め、この動く宝石に見とれるのはぜいたくというものだろう。

町の東西を結ぶ小出橋、新柳生橋、青島大橋一帯は鳥獣保護区に指定されてから水辺の鳥が多く集まるようになった。カルガモ、マガモ、コガモの他、少数派のオシドリやホオジロガモなど10数種。シノリガモが訪れた年

もある。近年増えているのがホシハジロで、その群れは右岸側の流れの速いところでカワアイサともども潜水して魚を食べている。カルガモが中州に近い浅瀬で水草をついばむのと住みわけしているのは習性の違いだと時折開かれる冬鳥観察会の指導により対比を示してくれる。

2月のよく晴れた夜、放射冷却で川霜が大発生するのがこの町の特徴で、このシガと方言で呼ぶ霧氷が柳の木を夜の間に飾る。鈴木牧之の「北越雪譜」にも紹介されているこのシガは、朝霧が晴れるにしたがって青空に姿を現すがその美しさはどんなクリスマス・ツリーにも負けない。最近ではカメラマンの来町もしきりである。さて、その青い空をシガにも負けない白さで優雅に飛来するのがダイサギである。ユリカモメの群れが来る。セグロカモメもその群れに混じって飛んでくる。

このカモメ類の識別にはお手上げで、図鑑には脚は淡紅色とあるのに黄色いものいる。若鳥かと思ったがそうでもないらしい。先日野鳥仲間の会の折、「足が黄色いセグロカモメが一杯来る」とつい口走ったら「それはカモメだろう、よく見てよ、もし黄色いのがいるとしたらそれはセグロカモメの亜種で少ないはずだ」と言われた。「ダイサギにも脚のすねから上が白っぽいももじろというのがいるから注意して見るといいよ」と教わった。

よわい古稀に近づいたが、この世には未知の事柄が星の数ほどあるとつくづく思い知らされるばかり、それは何も旅に出た時とは限らない。テレビを見てる時とも限らない。いま目の前に広がるふるさとの風景の中にも沢山あるらしい。家の近くの魚野川の河川敷にウマノズクサという珍しい植物があり、それを食草にするジャコウアゲハが舞うと聞いて今夏の散策が楽しみである。

老母と介護という「束縛」の中で暮らすからかえって得られる情報があり、見えてくる「未知」の世界もある。それに目を向けて生きてゆくことを大切にしたい。

清津峡探鳥会に参加して

新潟市 伊藤 登士子

平成12年6月5日、夫婦で清津峡探鳥会(南魚沼・湯沢トレッキングコース)に参加した。

前夜、総会に続いての研修会で「清津峡の鳥類相」の話聞いて、クマタカの出現頻度が64%と知り、期待して朝を迎えた。

翌朝4時半出発。八木沢の清津峡入口の駐車場で、52の瞳がいつせいに上空を隈なく探し求めた。しばらく見続けたが、残念ながらクマタカは出現せず、トレッキングコースを歩き始めた。あいにくの曇り空で気温が低いせい、鳥の声あまり聞こえてこなかったが、みごとなブナやトチの原生林と、はるか下を流れる清津川の清流に心が洗われた。何よりふかふかした枯葉を踏みしめる感触は心地良く、足取りも軽やかだった。



間もなく、クロツグミのひときわ明るい囀りが、急流の音と競いあうように聞こえて来た。

続いてオオルリが対岸の梢に出現。清れつな大気の中で見る美しい声と姿は、いつまで見ても飽きなかった。カワガラスが川の中へ飛び込んだりして、しきりに動きまわっている。うっそうと茂る林の中からキビタキやイカル、シジュウカラ、ゴジュウカラの声もしたが、姿を確認することは出来なかった。

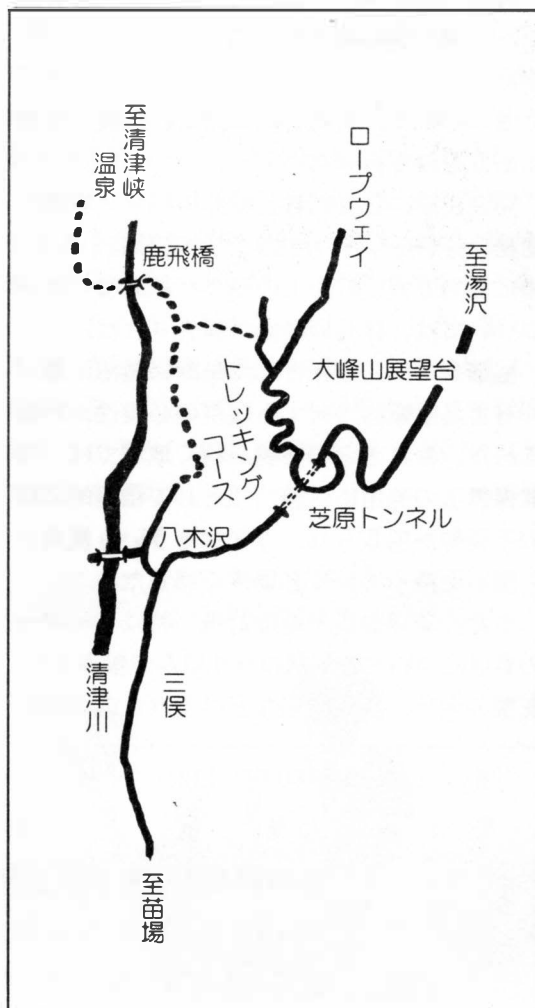
足元にひっそりと咲く紫色の花は、ラショウモンカズラと教えていただいた。図鑑には花冠の形を羅生門の鬼女の腕に見たと記述されていたが、私にはとても可憐に思えた。

“らくらくコース”だった為、鹿飛橋手前のフィットンチッド広場で折り返し、再び、駐車場に戻った。“アオバト!!”と叫ぶ会員の大きな声に空を仰ぐと十数羽の群が目に入った。今まで2、3度“オーアオー、アオー”と鳴く声を聞いたことがあるものの、群を見たのは初めてで、感激した。

今回の探鳥会では、私自身の未熟さのせいで、あまり姿を見つけることが出来ず、少々悔が残っていただけに、アオバトが掉尾を飾ってくれ、嬉しさがこみ上げて来た。

解散後、栄太郎峠に立寄ったところ、ブナ林の中からコルリ、アオジのかわいい、澄んだ声が聞こえて来た。又、野の花の中で一番大好きなイワウチワの大群落を目にした時、あまりのいとおしさに言葉を失った。

満足度100%の清津峡での探鳥会だった。



日本野鳥の会 中部ブロック会議報告

指導部 伊藤 浩

日本野鳥の会第8回中部ブロック会議が、富山県支部の担当で7月29日～30日に富山県大山町で開催された。新潟県支部からは桑原事務局長ほか4名で出席した。

昨年新潟で開催したブロック会議の際に、今回は立山で開催との話がでており、期待いっぱい参加であった。

29日は朝からの曇り空が回復し、気温もぐんぐん上昇していったが、私は岡田氏の愛車の3列目のシートで、快適な道中であった。往復の運転でご苦労いただいた岡田氏に感謝しています。

会議の会場は、富山厚生年金休暇センターで、新潟での開催を参考にしたとの事で、北陸自動車道立山インターから30～40分とアクセスもよく、周囲を緑に囲まれた良い環境にある施設であった。

開会挨拶、各支部自己紹介に続き、本部の総務課長から今後の活動について報告があり、特に愛知万博での海上の森の利用面積の縮小については、詳しい経過が報告された。

協議会では、改正された鳥獣保護法に基づく有害鳥獣駆除に対する監視の必要性が指摘された。密猟者との格闘が続く地域では、鳥獣保護法の運用に保護団体として積極的に関わる姿勢が感じられ、今後はそういう視点から関心を持っていく必要性を感じた。

また、若手会員の増加対策、特にリーダーの育成について各支部の取り組みが報告され、支部の大小、設立時期などは違うものの同じ

悩みをもつ様子が伺えた。

研修会では、立山の雷鳥の生活について、長年雷鳥の標識調査の実績を持つ、雷鳥研究会会長の熊木講師から詳しい研究結果が、たくさんスライド写真とともに発表された。

翌30日は、会場前から室堂ターミナルまで、富山支部会員のバスガイドさんによる観光案内を聞きつつバスで登り、2班に分かれ探鳥を開始したが、すぐに雷鳥が雛を連れて現われ、全員で見ることができた。また、カヤクグリやイワヒバリも見られ、海拔2500mの高山の鳥たちも楽しむことができた。

雷鳥は、捕食者のみでなく、生息環境の悪化や病原菌との闘いなど、いろいろな圧力により生息数の減少が心配されている。しかし、室堂の自然観察センターを見ると、行政と地元のボランティアが、なんとか次の世代への自然を残したいという情熱が感じられた。

探鳥会の時間を多くとったブロック会議だったが、取り巻く環境や設立経緯が異なる各支部との様々な意見交換は、新潟のこれからの活動を考える良い機会になった。来年は長野で行われる予定で、また新しい交流を期待したい。

参加者 14支部、55名



立山室堂にて

発行 2000年10月12日 No.50

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒951-8116 新潟市東中通1番町86番地28

TEL 025-229-2018 本間由紀子方 (振替口座) 00610-1-6002